



日本イスペインヤ学会
Asociación Japonesa de Hispanistas
会報第 16 号 / Boletín Núm.16
2010 年 3 月 1 日 / 1 de marzo de 2010

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
7-バン大塚 3F (株) ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364
e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp
ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/ajh/>

広報委員会編集部

〒618-0024 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学外国語学部スペイン語学科
坂東省次研究室 Tel:075-322-6121
e-mail:s_bando@kufs.ac.jp

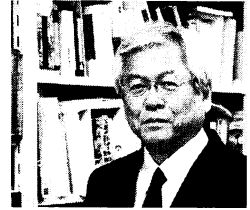
目 次

巻頭言 大航海時代と日本 — 16・17 世紀の日本・メキシコ・スペイン 交渉史の系譜 柳沼孝一郎	2
エッセイ	
1. あるイスペインア研究所の歩み 小林一宏	3
2. 「仮想的有能感」に挑む 齋藤華子	5
3. 一枚の Diploma から 高橋早代	6
4. エコについて考える旅 岡本淳子	7
5. 日本イスペインヤ学会における『ドン・フアン』劇評 (2009) 小阪知弘	9
6. フェリペ 3 世時代の美術 松原典子	10
自書紹介	
1. ミケル・シグアン著『二十歳の戦争』— ある知識人のイスペイン内戦回想録 (沖積舎、2009 年) 内田吉彦	12
2. 浅香幸枝編『地球時代の多文化共生の諸相：人が繋ぐ国際関係』 行路社、2009 年 浅香幸枝	13
3. 『征服王ジャウメー世勲功録』尾崎明夫	15
書 評	
1. 有本紀明『フラメンコのすべて』(講談社、2009 年)	16
2. 国本伊代『メキシコ革命とカトリック教会』(中央大学出版 2009 年)	17
3. グスターボ・アドルフォ・ベッケル『ベッケル詩集』 (山田眞史訳、彩流社、2009 年)	19
4. 杉浦勉『霊と女たち』(インスクリプト、2009 年)	20
5. 岡村春彦『自由人 佐野碩の生涯』(岩波書店、2009 年)	21
新刊案内	23
国内の学会案内	24
海外の学会案内	25
『HISPANICA』編集委員会より	28
編集後記	28

巻頭言 大航海時代と日本 ―

16・17 世紀の日本・メキシコ・スペイン交渉史の系譜

ヨーロッパ世界の人々にとって未知の国であった日本は、マルコ・ポーロ『東方見聞録』のなかで極東の太陽の昇る下に存在する黄金の国ジパングとして初めて紹介され、やがて「日出ずる国」を求めてヨーロッパ人が相次いで来航した。一方、レコンキスタを成し遂げ、宗教改革を達成させた激しいエネルギーが冒険精神をかきたて、大航海時代を生み、ヨーロッパ世界と日本を結びつ



柳沼 孝一郎

けた。なかでもポルトガルのエンリケ航海王子、ヴァスコ・ダ・ガマのインド到達、スペインのイサベル女王とクリストバル・コロンによるアメリカ大陸到達など、異教徒の地の発見と占領そしてキリスト教化の正当性と奨励を背景に、1494 年に締結された「トルデシリャス条約」を契機として世界を二分するかのように発見探検を展開させ、東洋の富とりわけ「香料」を求めて大洋に乗り出した。こうしてポルトガルはアフリカ大陸西岸を南下・迂回してインドに到達する「東廻り航路」を拓き東アジアまで進出を遂げ、「西廻り航路」を駆ったスペインはアメリカ大陸を確固たる植民地にしたのち、その余勢をさらに西へと移行させ、太平洋上の島々を領有しつつフィリピンにまで達し、マニラに総督府を置き東アジア進出を成し遂げ、以後 250 年間にわたる「太平洋ガレオン船貿易」の経営を通じ、太平洋における覇権を確立していった。16・17 世紀における日欧交渉はまさに大航海時代の延長線上で始動し、東廻りと西廻りを辿ったイベリア両勢力は東アジアで遭遇したがその拮抗関係は日本にまでもたらされ、スペインとポルトガルのイベリア両国が日本での布教権と通商権をめぐる対立する関係に、オランダとイギリスが日本市場における主導権の確立を目的に介入するという、いわば旧教国对新教国の衝突と拮抗が交錯するなかで展開された。

1584 年にスペイン人宣教師一行が九州・平戸に避難入港し、外国貿易を渴望する領主らに触発されてマニラでは日本布教熱が高まった。しかし、1549 年に来日した聖フランシスコ・ザビエルなどポルトガル側の宣教師はすでに布教活動を展開しており、戦国争覇時代にあって軍事・財政の強化が重視され、「南蛮貿易」が脚光を浴び、九州諸大名は交易船の領内誘致を考え、自ら「切支丹大名」となり積極的な態度で臨んだ。布教と貿易の不可分な関係のなかで、ポルトガル・イエズス会は日本伝道と対日貿易において絶対的な地位を築いた。スペイン王室の保護下にあったフランシスコ会が日本布教に参画する事態は、日本布教を事実上独占していたポルトガル・イエズス会にとっては放置できるものではなかった。その結果、日本における布教権をめぐるイベリア両国間に軋轢が生じ、対立抗争は激しさを増していった。こうした対立関係の下に豊臣秀吉は「キリシタン禁令」すなわち伴天連追放令を發布、やがて「長崎二十六聖人殉教」にまで発展した。

海外貿易を重視した徳川家康は「布教と貿易」の不可分の関係を考え、キリスト教を半ば放任する態度で臨んだ。一方、新教国のオランダとイギリスの日本進出を重く見たマニラ総督ロドリゴ・デ・ビベロは幕府に接近を試みた。こうした時にヌエバ・エスパーニャに帰国する途上でビベロ総督は時化に遭い、1609 年 9 月 30 日に上総国（千葉県）岩和田の田尻海岸に漂着、大多喜城主・本多忠朝から救援を受け、駿府の家康と謁見した。帰国の便宜が図られ、銀精錬技師の派遣斡旋の要請を受けたビベロ総督は、通商および鉱山開発・技術援助に関する『協定案』を提示し、直接貿易を熱望する家康は日本とヌエバ・エスパーニャの『平

和協定条項』を作成し、1610年8月1日（慶長15年6月13日）に使節を派遣した。

ヌエバ・エスパーニャ副王は遠来の使節に対する答礼使節として探検航海の功労者セバスティアン・ビスカイノを任命した。日本の東方海上の「金銀島」の発見、日本沿岸測量の実施、キリスト教容認運動が任務であった。幕府が唱えた直接通商についても討議されたが、キリスト教の布教が容認されておらず、貿易船の日本寄航の安全性が問われ、不確実な対日直接貿易より既成のフィリピン貿易を活用すべきとされ結論には至らなかった。ビスカイノ遣日使節団一行は1611年6月10日に浦賀に到着した。使節は秀忠と家康に謁見した後、オランダ人放逐に奔走し、伊達政宗の援助の下に沿岸調査を実施していた間に、江戸ではオランダ人のヤン・ヨーステン（八重洲）や家康の外交諮問役でイギリス人のウィリアム・アダマス（三浦按針）らによる反スペイン運動が展開され、奥州沿岸測量調査および金銀島発見は日本攻略の準備の何ものでもないことが暴露され、結果として幕府の心証を害し、従来のスペイン人に対する疑心をより現実的なものにし、深い不信感を植えつけた。

奥州王伊達政宗と宣教師ルイス・ソテロの間で、スペインおよびローマへの使節派遣が計画され、使節に支倉六右衛門常長が選ばれた。慶長遣欧使節は慶長18年9月15日（1613年10月28日）、牡鹿半島の月の浦を出港しアカプルコを目指した。一行は1614年1月25日、アカプルコに到着、途中、クエルナバカ大聖堂に立ち寄り、3月4日、馬上姿でメキシコ市に入城した。一行は歓迎され、スペインではフェリペ国王の厳かな謁見を受け、宣教師派遣も受け入れられ、友好通商関係の樹立に向けて踏み出されたかに思われた。フェリペ国王臨席のもと洗礼式が執り行われ、フェリペ・フランシスコ・ハセクラの名が授けられた。ローマでは教皇パウロ五世に謁見し、使節の大任を全うできたかに思えた。しかし、ルソンやマカオとの貿易を断絶する準備として幕府がイギリスとの通商を認め、日本でのキリスト教徒迫害の情報が入ると、使節一行は孤立を余儀なくされ、以後は失意の、そして絶望の帰路を彷徨うことになった。

その後、1623年（元和9年）にマニラ総督府の使節が訪日したが、謁見も許されなかったばかりか、キリスト教の厳禁、宣教師が渡来し宗教を広めることは国法に背くもので、今後マニラとの一切の関係を断絶する旨が通達され、フィリピンとの通商はもとよりヌエバ・エスパーニャさらにはスペインとの関係は途絶してしまった。

（やぎぬま・こういちろう 神田外語大学）

【エッセイ1】

あるイスパニア研究所の歩み

小林 一宏

2009年7月1日を以って上智大学のイスパニア研究所（以下、「研究所」）の名が学内の組織図から消えた。今後はヨーロッパ研究所の中のイベリア地域研究部門（Sección de Estudios Ibéricos）がその活動を引き継いでいくと聞く。名称の消滅は研究の解消を意味しないと理解される。

今回の学内組織の改変が、近い将来には回復が見込めない若年者人口の減少によって公立・私立を問わず日本中の大学が現在等しく直面している新入生の定員確保と財政危機とい

う二重苦への対応策の一環であることはここに指摘するまでもない。

「研究所」の歴史は文学部の中に外国語学科イスパニア語専攻が設けられたのを機に、在日スペイン大使館と上智大学との間に結ばれた協定に遡る。これに基づいて大使館附属の図書室が大学に移されて一般に公開された（1955）。それから三年後、文学部からの独立によってイスパニア語専攻が学科に昇格すると、同図書室の 6000 点餘の蔵書の管理・運営に当たる組織としてイスパニア・センター（Centro Hispánico）が設立され、初代センター長に新設学科のために着任して間もないイエズス会士 Enrique Ruiz Ayúcar 教授が就任した。

センターから「研究所」への改称の道程はさて置き、過去半世紀間のその主な活動としては以下のものが言及に値しよう。第一は、蔵書の充実への不断努力である。その結果、スペイン大使館から引き継いだ前述の蔵書数は、その後の新たな購入によって今回の統合時点では 22788 点と大幅に伸びた。この努力の成果は学内の教員と学生は元より、広く学外の関係者の利用にも供せられて高い評価を得、巡りめぐって学外者を含む少なからぬ方々からの貴重な寄贈となって「研究所」の更なる充実の一助となった。

第二は、各種の学術的な行事である。「研究所」はその歴史の 50 年間に国内外の研究者の参加を得てシンポジウムを 2 回、セミナーを 5 回、講演会を 26 回開催し、次いでこれらの成果を社会に還元する場として *Serie Cultura Hispánica* を刊行した。16 号を重ねた同誌は一部を除いて無料だった。

そして第三は、社会人を対象としたイスパニア語の夜間講習会である。まだ巷にはイスパニア語の講習会が見られなかった当時、Ayúcar 教授をはじめネイティブを軸に据えての「使えるイスパニア語」をモットーに掲げた同講習会は、それまでの外国語講習会の在り方に新風をもたらして大きな反響と高い評価を得、受講者は 32 年間（1960-1992）で総計 15000 人を超えた。

関連図書の収集、学術行事、社会人向け講習会。これらの活動を通して「研究所」が日本におけるイスパニア語の認知度の向上にどれほどの貢献をしたか、正確にこれを量る術は持たないが決して小さくはなかったと想像される。

今回の統合は直接間接を問わず「研究所」に携わった者が挙って素直に歓迎したわけではなく、名称が消えるのを惜しむ声は少なくなかった。しかし、統合が成ったいま、一步退ってみれば、先に触れた大学を巡る厳しい現状という圧力以外に、少なくとも次の二点が統合を是とするかに思える。ひとつはヨーロッパ連合（EU）の誕生である。これは政治や経済など現在から未来を予測する分野に携わる研究者には、従来の国別単位の研究からの脱却を強く迫る未曾有の変化である。しかし、脱却は政治・経済に限らない。今後のスペイン研究全体がこれまでも増して「ヨーロッパの中のスペイン」という視座を強く要求されるだろう。

もう一点は冒頭に触れたイベリア地域研究部門という今回の命名である。イスパニアがイベリアに取って代わられた。歴史を遡ればこの二語がまったくの同義であることから、この

変更は一見無意味にも映る。ポルトガルの国民詩人 Camões (1534-80) が São castelhanos e portugueses, porque espanhóis o somos todos と詠ったと何かの本で眼にした記憶があるが、確かに今から 400 年前まではポルトガルは Hispania に由来する España の名を他のイベリア諸国と共有していた¹。しかし、17 世紀から 18 世紀にかけての国民国家の伸張の結果、ポルトガルは España から次第に疎遠となっていく。以来、西葡関係はとにかく親和性を欠き、これが当事国内外の学術研究の場にまで不幸な影を落としてきたことは誰しも認めざるを得ないであろう。だが、今日の西葡両国は共に EU を構成し、すでにその間に国境はなく、着々と拡張する新幹線網がマドリードとリスボアを結ぶ日もさほど遠くはないと聞く。かつてある機会に出会ったブラジルを専門とする米国人研究者の大学での所属部署が Faculty of Iberian Studies²であったことが思い出される。

イスパニア研究＝スペイン研究はピレネーを越えると同時にイベリア研究に脱皮すべき時に差し掛かっている³。今回の統合と新たな部署名は「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるものだ」という聖書の一句を想起させる。「研究所」はその使命の第一段階を終えて、新たな段階に足を踏み入れたのである。

註 1) ユトレヒト条約 (1713) の折、スペインは España ではなく Castilla であるべきだとポルトガルの主張はこの文脈の中で理解される。

2) これが正確な名称であったか否かは記憶が曖昧だが、形容詞 Iberian は確かである。

3) 「イベリア研究」の名称にはカタルーニャ、バスコ、ガリシアなど、今日、自治意識が高揚している地域の研究も異論なく含めることができるという、もうひとつの利点が指摘される。

(こばやし・かずひろ 上智大学名誉教授)

【エッセイ 2】

「仮想的有能感」に挑む

齋藤 華子

卒業論文執筆を目指す学生から、『『仮想的有能感』というのに興味があるのですが』と相談を受けた。「仮想的有能感」とは「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される心理的概念である。何らかの成功体験に基づき自尊感情を高めるというのではなく、他者を自分よりも低く見ることによって、一時的にでも有能感を体験する。このようなタイプの若者が現代社会に増えているのではないか、という指摘がなされているのである。この「仮想的有能感」の無意識的な強さが他者を軽視する態度に反映している、との前提のもと、この新たな概念をめぐる研究が進められているが、これまでの研究結果は『他人を見下す若者たち』(速水敏彦著、講談社、2006 年) というインパクトあるタイトルの本にもまとめられている。

確かに日頃大学生と接していて、学生と教員、また学生同士の関係が年々希薄になっているのではという感覚はあった。また、現代の若者は自分の権利をはっきりと主張するが、他者に対して関心を持たなくなっている、という意見もよく聞かれる。それでも、自分以外の人を自分よりも低く見るような風潮、となると、身近な学生の中に納得するような言動はす

ぐには浮かばなかった。スペイン語専攻大学生の卒論として、どのようにこのテーマを扱っていけばよいか、学生共々頭を悩ませていたところ、ある授業の感想コメントに出会うことになった。

様々な分野で活躍される外部の講師をお招きして講演していただく、という一般教養の授業を担当した。授業の性質上、また多くの学生が出席することから、複数の担当教員は各授業開始前に受講生全員に対し、受講マナーを守るよう注意を意識的に促す、ということになっていた。その授業最終回の感想の中に、“授業態度の悪い人にだけ直接注意をしてほしい、真面目に聞いている私は不愉快な気持ちになるだけだ、受講態度のなっていない他の学生と自分を一緒にしないでほしい”といった内容のコメントがいくつか寄せられたのだ。実際の表現はもっと攻撃的であり、少なからず動揺を覚えた。と同時に、本の中の抽象的概念だったものが、具体的学生像として現れてきた気がした。

スペイン語の授業を考えてみる。今日のスペイン語教育において、コミュニケーション能力の養成を重視するコミュニケーション・アプローチに基づいたテキストは数多く出版され、使用されている。学習者が中心となって、実際のコミュニケーションにつながるような作業を体験できるように工夫がなされるコミュニケーション・アプローチの授業では、ペアやグループでの学習活動が勧められる。ゲームやロールプレイ、または実物教材を取り入れた多種多様なタスクが用意され、学習者はその中で情報を交換する。様々な伝達活動の中で他者との関わりが生まれる。このようなアプローチに基づくスペイン語の授業が展開される中に、「仮想的有能感」の高い学生がそこにもし存在するとしたら。自分の努力を通してではなく、他者を低く見ることで自分の優位を確立しようとする「仮想的有能感」の高い人は、他者との共感性に乏しいとの研究結果も報告されている。とすると「仮想的有能感」傾向は、学習者同士の情報交換、ペアワーク等が多く盛り込まれる外国語授業の中でこそ確認されやすいと考えられないだろうか。

この新たな心理的概念を中心に、スペイン語教育のどのような側面との関連を、どのように検証していったらよいのか、卒論提出までの期間、学生と共に試行錯誤が続くが、「仮想的有能感」が昨今の若者の特徴的一面なのだとすれば、外国語授業はその調査環境としては好都合の場であるかもしれない、何か興味深い結果が得られるのではないかと、という期待も膨らみつつある。

(さいとう・はなこ 清泉女子大学)

【エッセイ 3】

一枚の Diploma から

高橋 早代

これをお読み下さる先生方の中には、スペイン及びスペイン系アメリカの大学の正規の課程を修了され、それを証明する Diploma をお持ちの方もいらっしゃるだろう。私は持っていない。その私が、つい最近、必要に迫られてのことだが、某氏（以下、B 氏とさせて頂く）の Diploma をじっくり拝見する機会を与えられ、彼我の違いに驚くと同時に、その周到さに感服させられた。ここにその一端を述べさせて頂くことにする。

その前に一言お断りしておくと、B 氏は在マドリードのカトリック系の大学で日本の修士課

自転車の普及を支えるのは、環境保護に対する市民の関心はもちろんだが、インフラ整備でもあるわけだ。

スーパーマーケットでのエコバッグもオランダでは徹底していた。日本でもビニール袋有料の店はあるのだろうが、多くはマイバッグ持参でポイントが貯まるというシステムだ。バッグ持参に感謝、というスタンスだ。オランダの場合、バッグを忘れれば懐が痛む。オランダ在住の友人によれば、店によって多少のばらつきはあるものの、ビニール袋1枚につき約20セント取られると言う。約30円、決して安くはない。倹約家の多いオランダ人のこと、バッグ持参は徹底されているらしい。

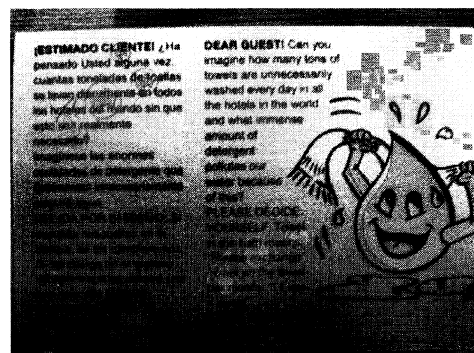
有料のビニール袋とは対照的に、ペットボトルの返却は1.5リットル容器1本につき25セント返金される。日本の場合、スーパー等のリサイクルボックスに戻すかどうかは各自の良心に委ねられている。面倒くさいときには、ごみの収集日に出してしまう人も少なくないのではないか。人間とは現金なもの。1本で約35円戻るとなると、多少の労力は惜しまずに、リサイクルボックスまで持って行くだろう。

それ以外にも、各家の前に生ごみ専用のゴミ箱が設置され、それが肥料として再利用されているなど、感心することが多い。Dutch (オランダ人) はケチの代名詞としても使われるが、環境資源の危機が問題となっている今の時代、ケチは美德である。

そして、私はスペインへ飛んだ。火祭りやトマト祭りなど、環境保護団体が青筋を立てそうな祭りの多いスペインだが、90年代には風力発電の拡大と開発支援政策で成果をあげた。そして現在では太陽光導入政策が注目されている。ただ、San Sebastián から Burgos、Segovia へと南下する道中、エコを感じる機会はなかった。スペイン人の友人にも尋ねてみたが、市民レベルでの環境保護意識は高いとは言えない。

しかし、マドリードのホテルで衝撃を受けた。バスルームに置いてあったカードに驚いたのだ。

¡ESTIMADO CLIENTE! ¿Ha
pensado Usted alguna vez,
cuantas toneladas de toallas
se lavan diariamente en todos
los hoteles del mundo sin que
esto sea realmente
necesario?
Imagínese las enormes
cantidades de detergente que
detrimentan innecesariamente
nuestra agua.
DECIDA POR SI MISMO: Si
deposita sus toallas en la
bañera, se las cambiaremos.
Si las cuelga en el toallero,
sabremos que las utilizará una
vez más. **SU MEDIO**
AMBIENTE SE LO
AGRADECERÁ.



確かに、家では手拭タオルもバスタオルも毎日は交換しない。お恥ずかしい話だが、忙しい時など、気が付けば一週間同じタオルがかかっているときもある。それなのに、ホテルではタオル交換のサービスを当たり前を受けてきた。お金を払っているのだから当然の権利と言わんばかりに。

政府レベルで行なう環境対策はもちろん重要だ。しかし、我々一人一人ができるエコの取り組みもたくさんあるはずだ。コマーシャルは省エネを謳い、家電製品の買い替えを促す。買い替えのため不用となった、まだ動く家電たちはどこへ行く？第13回手帳大賞の受賞作は、「一番の『エコ』は、とことん、使うこと」であった。本当の意味でのエコとはどういうものなのか。エコをブーで終わらせてはならない。

(おかもと・じゅんこ 大阪大学)

【エッセイ5】

1200

日本イスパニヤ学会における『ドン・フアン』劇評 (2009)

小阪 知弘

2009年度日本イスパニヤ学界第55回大会の行事の一環として、10月10日(土)静岡芸術劇場において、コロンビア人演出家、オマール・ポラス氏の演出の下、SPAC(静岡芸術センター)による『ドン・フアン』の舞台が上演された。

舞台は明暗のコントラストを基調に構成されており、舞台奥に広がる闇の中から各々の俳優が仮面をつけて舞台に登場する。登場人物の性格は仮面によって完全に記号化されており、それらは身振りやダンスと組み合わせられて独自の劇言語を構築していく。このようにコード化された身体言語によって表現される『ドン・フアン』の舞台が観客に提示するのは<イメージの裏切り>である。では、その<イメージの裏切り>とは何か？それは<パロディ>としての『ドン・フアン』である。舞台は終始一貫してアイロニーに満ちた<笑い>の空間として視覚的に構成されており、ポラス氏の演出は、色男の系譜としてのドン・フアンのイメージを転倒させ、パロディの修辞によって視覚に歪みを生じさせながら、我々観客を見事に裏切りとおしていく。



圧巻であったのは二つの場面である。一つ目はドン・ゴンサロの石像がドン・フアンの家を訪問する場面。この場面は、天井からドン・ゴンサロの石像が舞台上に舞い降りてくるよう設定されており、言わば、垂直演出を媒介としてドン・ゴンサロの像が神のように顕現し

てくるよう、ポラス氏の計算によって仕組まれていたのだ。もう一つは、ドン・ゴンサロによってドン・フアンが業火に焼かれる場面。派手に演出されることが多いこの場面をポラス氏は敢えて抑制してオブラートに包むことによって、観客の想像力に喚起するよう演出していたのである。静けさの中、カーテン奥に透けて映し出されるドン・フアンの宙吊りの姿は、我々観客の心を恐怖と神秘の中へと引きずり込んでいったのである。

また、『ドン・フアン』の舞台を神話的な立場から振り返ってみると、そこにはドン・フアンの諸原型が様々な形で組み込まれていたことが確認できた。劇はティルソ・デ・モリーナの『ドン・フアン』風に始まり、中盤の歌劇的なアプローチはモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』風に色づけされていた。そして、最後の場面はモリエールの『ドン・ジュアン』的に締めくくられていたのである。

このように、演出作法がフランス風にまとめられていたことは顕著であるが、一步後退して、鳥瞰的な視座から舞台を展望してみれば、その全体像として立ち現れてくるのはスペイン的な多様性であったということだ。俳優達の出・退場や場面転換を遠くから眺めていると、舞台空間はクルクルと万華鏡のように回転しながら異なる視覚を織り成していき、最終的にそれらは統合されてスペインの風土のように多面的な全体像を露にしたのである。

観劇後に行われたアフタートークも魅力的な内容であった。演出を指揮したポラス氏とスペイン黄金世紀演劇の研究者で、『ドン・フアン』に関する秀逸な諸論文で知られる同志社大学の稲本健二教授が中心となってトークは展開されていった。カルデロンの研究者として著名な古屋雄一郎先生が達意のスペイン語で観客とポラス氏との間を見事に繋ぎとめながらトークは和やかな雰囲気の中進められ、我々観客は舞台作りの内側と『ドン・フアン』の深層へと導かれていったのである。ここで特記しておきたいのは、アフタートークもまたポラス氏と稲本教授のコラボレーションによって舞台として演出されていたということである。具体的に言えば、ポラス氏が被っていた<黒色の中折れハット>と稲本教授が着けていた<赤色のネクタイ>がスペイン演劇を表象する視覚的記号として舞台上で輝いていたことである。ミゲル・ミウラの『三つの山高帽子』(1932)を引き合いに出すまでもなく、山高帽子はサーカスや舞台を示唆する演劇記号であり、赤色という色彩は、<スペインの情熱>を表す色彩記号である。このようにして、<黒色の中折れハット>と<赤色のネクタイ>が静岡芸術劇場の舞台上で出会い、共鳴しあったことはシュルレアリスム的な偶然の出会いと見做すことも可能であり、日本イスパニヤ学会第55回大会に花を添える画期的な出来事となったのである。

(こさか・ともひろ 関西外国語大学)

【エッセイ6】

フェリペ3世時代の美術

松原 典子

すでに1年以上前の話になるが、2008年4月から11月にかけてボストン美術館とナッシャー美術館で開催された展覧会、"El Greco to Velázquez: Art during the Reign of Philip III"は、17世紀のスペイン美術を取り上げた企画としては画期的な内容であった。メイン・タイトルの「エル・グレコからベラスケスまで」を見る限り、黄金世紀の巨匠たちの作品を並べたありがちな名品展の類を想像してしまうかもしれないが、重要なのは「フェリペ3世時代

の美術」というサブ・タイトルとの組み合わせである。というのも、タイトルを飾っている巨匠のうちエル・グレコはこれまで常にフェリペ2世の治世の枠内で語られてきたし、ベラスケスは言うまでもなくフェリペ4世に格別の愛顧を受けた宮廷画家として、その時代の代名詞のような存在なのだ。その2人の名を冠して「フェリペ3世時代の美術」とうたったのである。

そもそもフェリペ3世という君主は、王国の最盛期にあたる16世紀後半にカトリックの擁護者として対抗宗教改革を牽引した父フェリペ2世と、治世下で絶頂に達した文化的繁栄のおかげで、政治力の無さにも関わらず一定の評価をされてきた息子フェリペ4世の間に挟まれて、歴史的には何とも影の薄い存在である。政治の実権は寵臣レルマ公爵に握られ、取り柄と言えば父に劣らぬ敏度さくらいなものというのが、最近までの一般的評価だった。美術史的に見ても、フェリペ2世のエル・エスコリアル修道院や、フェリペ4世のブエン・レティエロ宮あるいはエル・パルドの狩猟休憩塔に匹敵し得る、自らの治世の象徴的事業を手掛けず、また父親にとってのティツィアーノ、息子にとってのルーベンスのような、国際的に名高い画家を最員にすることもなかった。その一方で、父フェリペ2世が手に入れたティツィアーノの〈ポエジア（詩想画）〉連作をはじめ、王室コレクションにある「淫らな裸体」が描かれた作品を焼却してしまおうとして周囲に制止されたなどというネガティブなエピソードは、伝わってきている。実際には、火災で損壊したエル・パルド宮を再建して絵画装飾をさせたり、王室コレクションをそれなりに充実させたりしたのだが、不運にも作品の保存状態の悪さや記録の欠落などが相俟って、美術への貢献という点でもフェリペ3世に対する後世の評価は散々であった。

しかし、ちょっと考えてみれば1598年から1621年というフェリペ3世の治世は、1614年に没したエル・グレコの晩年と重なっており、他方でそれは、1617年に徒弟修業を終えて独立するベラスケスの生誕から青年期にもあたる。エル・グレコがスペインで過ごした38年のうちの三分の一以上はフェリペ3世を王と仰いでいたし、ベラスケスは人間としても画家としても、フェリペ3世の時代に形成されたのである。それならばエル・グレコとベラスケスを、それぞれフェリペ2世とフェリペ4世の時代のみの文脈で片づけてしまってよいはずはない。そんな単純な事実が長い間、意外にも十分認識されていなかったことを目の前に突きつけられて、虚を突かれる思いがした人も少なくなかったのではないだろうか。

昨年の展覧会は実のところ、フェリペ3世の治世の歴史的再評価と歩を合わせるように近年進展してきた、同時代の美術に関する調査研究活動の一里塚と言えるだろう。監修者の一人でナッシャー美術館学芸員のSarah Schrothは、フェリペ3世の寵臣であった初代レルマ公爵の財産目録を初めて本格的に調査し、1990年の博士論文においてその膨大な美術コレクションの詳細を明らかにした人物である。20年越しの研究成果と情熱を注ぎ込んで、この展覧会を実現にこぎつけたというわけだ。この間、アメリカとスペインの研究者によって、フェリペ3世の指揮下で行われたエル・パルド宮再建装飾事業やレルマ公爵のパトロネージ、同時代の画家や彫刻家に関する個別研究も飛躍的に進んだが、この時代の画家とその作品を広く一般に紹介するという意味では、1993年にプラド美術館で開かれた展覧会、“Los pintores del reino de Felipe III”が直接の先駆けであった。そこでは今回の展覧会と同様、宮廷肖像画家フアン・パントーハ・デ・ラ・クルスやバルトロメ・ゴンサレス、17世紀初頭のマドリッド画壇の重鎮ながら、ベラスケスの登場ですっかり霞んでしまったビセンテ・カルドゥーチョやエウヘニオ・カヘース、エル・グレコの助手のルイス・トリスタン、ベラスケスの初期

作品に結びつくボデゴン（厨房画）の旗手サンチェス・コターンやバン・デル・アメンなどが名を連ねた。しかしながら、全 42 点の中に入るべきベラスケスの初期作品は含まれず、エル・グレコも小品 1 点のみだったこと、マドリード、トレドといった作家の活動地域別に並べるという平板な展示だったことから、フェリペ 3 世時代の美術を際立たせるには、全体としてややインパクト不足であった。

それから 15 年を経た昨年の展覧会は、エル・グレコ、ベラスケスを含む 20 人の作家による 62 点の絵画、彫刻に、それとほぼ同数の工芸品を加えた全 122 点によって構成された。ここに提示されたフェリペ 3 世時代の美術がはるかに立体性を増したように見えるのは、各国から集められた個々の作品の質の高さに加えて、蓄積された多方面での研究成果に裏付けられているからであろう。Schroth が総括したように、この時代の宮廷肖像画はフェリペ 2 世の頃の敬虔さを保ちつつも、より壮麗であり、受難のキリストや聖人の姿は、緩和された宗教政策ゆえに、かつては危険視された神秘思想の影響を色濃く示している。一方、マドリードをはじめとする都市の発展に伴い社会が世俗化の兆しを見せたこの時代、イタリアやネーデルラントの影響下で、直接的で自然主義的テーマや表現が好まれたことは、聖職者や文化人の率直な姿を描き出した肖像画、そして優れた静物画やボデゴンの作例によって証明されている。これらの作品の展示は、エル・グレコ最晩年の代表作である幻想的宗教画《ヨハネの幻視》や現存する唯一の神話画《ラオコーン》などによって幕を開け、ベラスケス初期のボデゴン《卵を料理する老女と少年》によってその幕が引かれていた。文字通り「エル・グレコからベラスケスまで」である。この展覧会で示されたフェリペ 3 世時代の美術の解釈と、個々の作品、事象に関する新知見については、今後、更なる検証と深化が求められている。ともあれ、おそらくは集客戦略もあって打ち出されたこの 2 人の巨匠に惹かれて訪れた観客のうちに、「フェリペ 3 世時代の美術」の存在が強く印象づけられたであろうことは、間違いのないであろう。

（まつばら・のりこ 上智大学）

【自書紹介 1】

ミケル・シグアン著『二十歳の戦争』— ある知識人のスペイン内戦回想録（沖積舎、2009 年）
内田 吉彦

Educación y bilingüismo (Santillana/UNESCO, Madrid, 1986), *España plurilingüe* (Alianza Editorial, Madrid, 1992), *La Europa de las lenguas* (Alianza Editorial, Madrid, 1996) などの著作で知られる元バルセロナ大学心理学部長 Miquel Siguan (1918~) が、自らの内戦体験を回想録としてまとめたものが本書 *La guerra a los veinte años* (El Ciervo, Barcelona, 2004) である。カタルーニャ語による初版 *La guerra als vint anys* (La Campana, Barcelona, 2002) を著者自身がスペイン語訳したものである。

ミケル・シグアンが共和国軍兵士として入隊したのは、内戦勃発より 1 年半ほど経過した 1937 年のクリスマス直後、当時はバルセロナ大学哲学科の学生で、カタルーニャ学生連盟 (FNEC) 書記長の任にあった。何人もの同僚・友人のように、士官学校に転じ即席の将校になることも、後方の支援部隊に回ることも可能だったが、あえて徴兵事務所の命に従う道を選び、同期召集の 19 歳の仲間と配属されたのが、テルエル戦で活躍するも損害を受け、再編された直後のレバンテ方面軍第 82 旅団、すなわち元アナキストの義勇兵を母体とする部隊で

あった。

著者にとって「政治的信条からはもっとも遠い人達だった」彼らと、機関銃中隊の射撃助手、読み書きができない兵士のための手紙の代読・代筆と識字教育を担当する文化民兵として前線で暮らし、最後は1週間の休暇を数日オーバーして原隊に戻る途中拘束され、懲罰隊送りとなり、1939年の敗戦を迎えるまでの約1年半、「戦争という集団的狂気」の中で、二十歳の青年が無心に見つめた人間とその行動についての記録である。

著者が言うように、本書は一つの軍事史、あるいは政治的立場を明らかにすることを意図したものではない。反乱を起こしたフランコ軍に対抗し、志願兵として共和国民兵隊に参加したアナキスト兵士達の、いわば希望と絶望を、一人の若者の個人的体験、さらにはその柔軟でくもりのない思考と観察を通して描こうとしたものである。

それを可能にしたのは、著者が帰還後すぐに書き記しておいた戦場生活の記録である。この記録によって兵士達の鮮やかな人間群像を描くことに成功している。日常接している隊長、将校、下士官、兵卒たちの経歴・職業が実に興味深い。最も身近にいた機関銃小隊の伍長（班長）は元 FAI（イベリア・アナキスト連盟）の行動委員会メンバー、つまりテロリスト、その部下は農民、日雇い人夫、中隊長の大尉は労働組合幹部、その右腕の政治コミサールは石切り職人、大隊長の少佐は金属工、もう一人の少佐は高級レストランの給士、そして政治コミサールは理髪師、旅団の軍医は侯爵、情報担当官は小麦の収穫期に合わせ全国を移動する麦刈り人、その他羊飼、左官、大工、電気工、発破係の鉱夫など……

彼らアナキストの目的はフランコ軍との戦闘に加え、社会革命をもたらすことにあった。そのために民兵達が行った農業の集産化とその失敗、CNT が推進した産業の集産化とその失敗、カタルーニャ自治政府と CNT/FAI のアナキスト・グループがバルセロナで闘った“五月事件”、第 84 旅団の命令不服従事件、そして「共和国軍を支配していた共産党」による抑圧などが、彼らによって悔恨を籠めて回想される。その中には CNT 系協同組合がつくった“民兵部隊ブランディール”も登場する。

内戦終結から 70 年が過ぎ、人生の最晩年を迎えた老学究の、スペインの若者たちに直接内戦体験を語り伝えておきたいという強い思いが、本書から伝わってくる。

過去の戦争とどう向き合うか、日中戦争から被爆体験までの歴史をもつ日本人にとっても、重くかつ大きな課題である。

（うちだ・よしひこ フェリス女学院大学名誉教授）

【自書紹介 2】

浅香幸枝編『地球時代の多文化共生の諸相：人が繋ぐ国際関係』行路社、2009 年

浅香 幸枝

本書は南山大学地域研究センター共同研究シリーズ 第 1 巻であり、373 頁、3 部構成、15 章から成り立っている。2006～2008 年度共同研究「多文化共生の諸相：ラテンアメリカと日本の日系ラテンアメリカ人社会の事例から」（代表：浅香幸枝）の研究成果である。

多文化共生できない問題点を指摘する研究が多い中、現実已成功している共生事例から法則なり手法を導き出したこと、近代化のモデル＝欧米というパラダイムに対して「多文化共生」という視点から再考を迫り、21 世紀の諸文化のあり方を考察し提示している。2008 年末、190 カ国から 220 万人以上（人口の 1.74%）の外国人登録者が日本に生活している今日、ぜひ

多くの方たちに読んでいただき、一緒に考えていただきたいテーマである。教科書としてお使いいただいても、大学生や院生の皆さんにも使いやすいものとなっており、教室での討論がしやすい本に仕上がっている。

本書は、「まえがき」と「あとがき」で、全体像と各部・各章とのつながりを一望できるようにまとめている。全体をつかんでから、読者の関心のある章を読んでいただけると、分かりやすく共時的、通時的にも思索が深まるようになっている。

第1部は多文化共生政策について、第1章 日本の多文化共生政策—内発的發展論の視座から（浅香幸枝）、第2章 ブラジルにおける多文化共生政策について—比較法的側面を手掛りとして（二宮正人）、第3章 アルゼンチンの多文化共生政策—隣国移民政策から日本の移民政策を考える（アルベルト松本）の3章から成る。日本の多文化共生政策を考えるために、ブラジル、アルゼンチンの事例と比較している。

第2部は、多文化共生の諸相を教育、ビジネス、オールドカマーとニューカマーの関係、宗教、踊りの中に見出し、その共通項と少しの心配りを描き出している。大上段な議論をするよりも、実際の生活では、言語が通じさえすれば、人として共感し合う部分が多いからである。第4章 すべての子どもたちに学ぶ歓びを—ムンド・デ・アレグリア学校の挑戦（松本雅美）、第5章 ビジネスにおける在日日系人の挑戦（コンダカル・ラハマン）、第6章 多文化共生を求めて—オールドカマーとニューカマーの共存の事例（梶田純子）、第7章 在日ペルー人の宗教行事「奇跡の主」—異文化受容の視点から（寺澤宏美）、第8章 YOSAKOIソーランが繋ぐ「ブラジル」と「日本」（渡会環）で、多面的に多文化共生の事例を描いている。

第3部 多文化共生の歴史と概念では、通時的に見た時、多文化共生概念はどのようなものがあり、現代に活かすことが出来るのかという問いである。第9章 インカ帝国における多民族・多文化状況（渡部森哉）、第10章 アステカ帝国と周辺諸民族との関係—中心と周辺の視点から（井関睦美）、第11章 多文化共生社会における地域アイデンティティの意味—メキシコ・ワステカ地方先住民社会の多文化共生史の視点から（河邊真次）、第12章 江戸の多文化共生パラダイム（アッセマ庸代）では、ラテンアメリカと日本の歴史から知恵を提示している。

第4部 多文化共生の架け橋：日系人大使との対話では、共同研究当時日本におられた3人の日系人大使のお話と交流の様子を記録した。3人とも大統領による政治任命であり、信任は厚い。日本にいる外国人子弟たちも、この大使のような活躍を期待できないだろうか？また、社会に統合されるということの意味はどういうことなのかを3人の大使に語っていただいた。第13章 パラグアイにおける日本と日系人—移住者として市長として大使としての体験から（田岡功 駐日パラグアイ大使）、第14章 移住者が繋ぐ両国関係—多文化共生—相互理解と対話（セイコウ・ルイス・イシカワ・コバヤシ 駐日ベネズエラ大使）、第15章 多文化共生の架け橋—移住者が繋ぐ両国関係（マサカツ・ハイメ・アシミネ・オオシロ 駐日ボリビア大使）は、公開の講演をしてくださった後、学生や研究者と意見の交換をした。

多くの人の協力で出来た本書を、たくさんの方たちに読んでいただきたい。

参考ホームページ

「多文化共生の諸相」（2006-2008 年度共同研究）

http://www.nanzan-u.ac.jp/kenkyu/ic/kyodo/2006-08_03.html

（あさか・さちえ 南山大学）

【自書紹介 3】

『征服王ジャウメー世勲功録』

尾崎 明夫

中世スペインでは年代記が数多く書かれたが、その中でも異彩を放つのが、アラゴン連合国の王ジャウメ 1 世（1208～1276）の『勲功録』Llibre dels fets である。その特徴は、中世西欧では異例の王による自伝であること、カタルーニャ語での最初の散文文学であることにある。すでに英語、仏語、現代スペイン語の翻訳が出版され、イタリア語訳も準備中ということでもその価値の一端はうかがい知れよう。

著者ジャウメ 1 世の一生は世界史的イベントに彩られている。父親が命を落とすアルビジョワ十字軍とのミュレーの戦い、マヨルカとバレンシアというイスラム王国の征服、ムルシア王国の再征服、失敗に終わるが聖地十字軍の遠征、リヨンの公会議、といった具合であり、本書が当時の政治、社会、制度についての第一級の史料と言われるゆえんである。また、その叙述は現場にいた本人によるものであるがゆえ、臨場感に富み、戦場で死と隣り合わせの兵士たちの息づかいが聞こえてくる。

日本の軍記物と同じく、戦闘にまつわる諸事件の描写が紙面の大半を占めるが、著者はしばしば「余計なこと」と自らが呼ぶような些事も随所に語っていて、生活史探求のよい資料を提供している。例えば、食事や午睡の習慣、信心生活、狩猟、テントに巣を作ったツバメ親子への心遣い、賢明な統治術の薫陶、偽金事件の捜査、そしてレコンキスタの戦記物ならではの、サラセン人との駆け引きでは戦闘と、双方の陣営を行き来する貴族や兵士があったことなど、一筋縄では行かない両者の関係が生き生きと描かれている。

さらに、王自身の心の内部が赤裸々に語られていることも珍しくない。征服戦に非協力的な騎士に対する怒り、大作戦が失敗するのではとの恐れ、危機に面して天に上げられる祈り、領土を侵す者への容赦のない仕打ち、敵対していた皇太子が父の赦しを求めて来たときの歓喜と情愛、これらが本書を読み物としても魅力あるものにする。

この回顧録は、無論ジャウメの一生のすべてを語っているわけではない。その空白や時に見られる錯誤は注によって補われている。また解題では、中世スペイン史の概要が綴られ、ジャウメ 1 世の時代、すなわちレコンキスタの時代の解説もされている。本書で語られる場面に登場する武器や武具や習慣を表す図解、ミニアチュールと写真も、中世スペイン世界の理解を助ける一助になろう。ジャウメ 1 世の生誕 800 周年を迎え、スペインでは多くの学会発表や研究書が生まれている。本書が西洋史研究のみならず、西洋文学、社会経済史学など、我が国のヨーロッパ理解に、これまでにない厚みを加える一助になると期待する。

（おざき・あきお 長崎精道学園）

書名：征服王ジャウメー世勲功録 レコンキスタ軍記を読む
編著者：ジャウメー世 著／尾崎明夫・ビセント・バイダル 訳
姿：A5 上製・630 頁 2010 年 2 月発行
価格：税込 6,930 円
発行：京都大学学術出版会



【書評1】

有本紀明・著『フラメンコのすべて』（講談社、2009年）

桑原 真夫

終にこれまで誰も書けなかったフラメンコのすべてを網羅した大著が出版された。しかも一つの物語をひも解く形で読者をフラメンコの深遠まで導いてくれる。プロローグの「フラメンコの魔力」からして蠱惑的である。炎のような赤い衣装で踊る裸足のラ・チェンガ。これこそ「噂に聞く妖しい魔力のドウエンデ」ではないかと著者は自問しつつ、読者をフラメンコの旅にいざなう。

第一章は「フラメンコ巡礼」である。自らのアンダルシアへの旅からこの本は開闢する。友人の結婚式に招待された著者はスペイン人の奥方と長女と三人で披露宴に臨む。そこで詩人で弁護士のドン・アントニオと出会う。フラメンコの坩堝であるアンダルシアに生きフラメンコに生涯をかけている詩人の言葉に耳を傾ける。それから著者はアンダルシアの8つの県にフラメンコ行脚の旅にでる。セビーリャ、ヘレス、コルドバ、グラナダ、ムルシア、アルメリーア、カタルヘーナ、リナレス、ハエン、エストレマドゥーラと回りマドリード、バルセロナへとフラメンコのルーツを求めて。その深く濃厚な探究心によりセラ、カミロ・ホセバリの叙情味豊かな文章が綴られる。

第二章は「フラメンコ誕生、カンテの歴史」である。フラメンコの前史から始まり、黄金期と呼ばれるカフェ・カンタンテの時代から、現代のフラメンコ・フュージョン（他のジャンルとの実験的な融合）にいたるまでを概観し、フラメンコが世界において市民権を獲得するまでのストーリーが展開される。著者が一番力を入れて書いた章ではなかろうか。これまで幾多のフラメンコに関する本が世に出たが、この章にはすべてのフラメンコの歴史が包含されている。

第三章は「バイレ、フラメンコの華」である。舞踏誕生から劇場バイレ、再び劇場へと続く。初期のフェルナンド・アントゥーネスからラ・マカローナ、ラ・マレーナ、ラ・メホラーナ、リタ・オルテガ、ペパ・デ・オロと歴史に名を残した踊り手たちの説明がなされる。そして舞踏の母とも言われるラ・アルヘンティーナ。ミュージズの踊り手パストーラ・インペリオ。ファリャはパストーラから靈感を受けて「恋は魔術師」を作曲した。生涯アンダルシアの美女を描き続けた国民的画家フリオ・ロメーロ・デ・トレスも熱い視線でパストーラを描いている。このあとも驚異のバイラオーラたちが陸続と紹介されているのは圧巻である。

第四章は「匿名の主役、トケ」である。フラメンコには3つの要素がある。カンテ、バイレ、トケである。「（トケの主役である）ギターは、カンテの言葉を説明するものでも補完するものでもない。ギターは、カンテと同等の位置に自らを置き、次第に行動的な立場をうかがいながら、カンテと対話することで一種の弁証法的な戦いをもちかけるのだ。」然り、至言と言えよう。

第五章は「フラメンコを取り巻く世界」である。フラメンコの衣装、ペニャ・フラメンカ、闘牛とフラメンコ、ロマの歴史の説明。そして最後には「フラメンコの曲形式」「フラメンコ用語集」「ペニャ・フラメンカ・リスト」「フェスティバル&コンクール・リスト」「フラメンコ・ディスコグラフィ」と重厚な補筆がある。

本著は、セラ、カミロ・ホセの翻訳者であり名著『スペイン・聖と俗』（NHK ブックス）と『闘牛』（講談社選書メチエ）の著者でもある有本氏であればこそ出来上がった巨大なピラ

ミッドと言えよう。然るべき賞を必ずや受賞すべき出色のスペイン関連学術図書と言える。
(くわばら・まさと 詩人、エッセイスト)

【書評 2】

国本伊代著『メキシコ革命とカトリック教会』（中央大学出版 2009 年）

立岩 礼子

本書は、著者が一昨年東京大学に提出した学位論文がもとになっている。すでに著者はラテンアメリカ研究のメッカであるテキサス大学で歴史学の博士号を 1975 年に取得し、『メキシコの歴史』（新評論, 2002 年）や『概説ラテンアメリカ史』（新評論, 1992 年, 改定新版 2001 年）などを単著で手がけ、ラテンアメリカへの日本人移民についても精通する。共編著に『ラテンアメリカ研究への招待』（新評論, 1991 年, 改定新版 2005 年）もある。ラテンアメリカ各地域の歴史及び社会への眼差しは深い。従って、私のような若輩者が本書を評する資格はないのだが、自宅ポストに編集委員からの依頼の封書が入っており、長々と断りの手紙を書くくらいならば本書を読み、勉強させていただこうと思い至った次第である。

本書は、サブタイトル「近代国家形成過程における国家と宗教の宥和」が示す通り、メキシコ革命の所産である 1917 年憲法によって否定されたカトリック教会の法的地位が、1992 年の憲法改変によって回復されるまでの過程が考察されている。メキシコではスペイン支配によってキリスト教を基盤とした社会が構築されて以来、今世紀に入ってもカトリック信者数が国民の 8 割を越える。しかし、スペインから独立した後の 19 世紀後半に起こった保守派と進歩派との内乱によって、カトリック教会はその不動産を解体され、特権も剥奪され、1910 年に勃発したメキシコ革命によってその法的地位さえも否定されることになった。本書では、この決裂がいかに修復されていったのか、メキシコ政府とカトリック教会が歩み寄った原因は何かという疑問を軸に分析が進む。膨大な先行研究と 20 世紀初頭からの諸説が整理され、メキシコ国会図書館およびアメリカ国務省所蔵の資料などの援用によって、メキシコの近代化の歴史に鋭い眼差しを注ぐものとなっている。

第 I 部「革命以前の政教関係」では、メキシコとカトリック教会の関係を征服の時代からメキシコ革命によって倒されたディアス独裁政権までが考察されている。注目すべきは、多くの研究者がディアス独裁の時代にカトリック教会が社会活動を通じて息を吹き返したと解釈していることに対して、著者は、メキシコ経済省のデータからディアス政権下で近代教育制度の整備と初等教育の無償・義務化が進展し、政権後半においては初等教育を受けた児童の 8 割前後が公立学校の生徒であったことなどを読み取り、異論を唱えている点だろう。

第 II 部「革命期の政教関係」では、国民カトリック党が取り上げられ、メキシコ革命指導者マデロによる民主化のもと、教会トップの強い意志によって信徒による政党が組織されたことが注視されている。著者は、民主化の過程で誕生したこの国民カトリック党が政教分離の原則を守りながらも保守勢力を束ねることもできず、またカトリック教会には保守勢力に軍資金を提供する余裕もなかったため、3 年という短命で終わり、その後の 1917 年革命憲法制定の過程で保守勢力が完全に排除されることになったと考えている。さらに、この憲法の反教主義的な条項について原案、委員会案、成立した条文を比較分析している。それらの条項とは、初等教育の非宗教化（第 3 条）、公衆を対象にしたいずれの宗教的行為の寺院内実施（第

24 条)、宗教団体の法人格を認めず、聖職者は 1 つの職種として法に従うことを定めた宗教団体と聖職者の活動の規制 (第 130 条)、教会による不動産の取得と保有の禁止 (第 27 条) である。当時の審議の記録を辿り、議員たちの教会や聖職者に対する反感がいかなるものであったかが窺える発言が多く引用され、興味深い。自由主義革命を経験した 19 世紀スペインにおいて、カトリック教会や聖職者に対して盲目的に服従する大衆を描いた画家ゴヤの眼差しと共通するものを感じた。

第Ⅲ部「対決から協調へ」では、1920 年から 1992 年までのメキシコとヴァチカンの関係修復の過程が詳細に分析されている。1920 年以降、憲法の反教権的な条項をめぐって教会は政府と対立したが、宗教戦争を経て、1929 年には和平を結び、その後 1970 年代までは、「カトリック教会をメキシコの近代化を阻害する要因」とした教科書記述問題、メキシコオリンピック直前の政府による学生虐殺と投獄、人口増加を抑制するための避妊などの案件で、両者は妥協を重ねていく。1960 年代のラテンアメリカでは「解放の神学」が広まり、貧困者の救済と宗教の新しいあり方が模索されたが、教会は政府と協力することによって革新派司教らを隔離追放しようと画策した。1979 年に故ヨハネ・パウロ 2 世がヴァチカンと外交断絶中のメキシコで開催されるラテンアメリカ司教協議会に出席したが、メキシコのポルティエーヨ大統領はローマ法王をメキシコ国民の精神的リーダーとして公式に受け入れたことから、違憲論議が巻き起こり、改憲論の是非をめぐる議論が高まっていった。さらに 1980 年代の経済危機において、教会は、政府の経済政策が貧困を招いていると批判して発言力を強める一方、政府は国民の信頼を取り戻そうと教会に接近したため、両者の協調関係はますます緊密化していった。著者はこうした一連の歴史の流れの延長に 1992 年の憲法改変があるとし、とりわけ 1988 年にサリナス大統領が就任演説で両者の関係を修復すると述べた短い発言に注目している。1992 年には、改変されなかった条項もあるが、教会および宗教団体の法人格が認められ、教会による不動産の取得・所有も制限つきで可能となったことは注目すべきである。教会および聖職者による公教育への関与や修道院の設立も認められ、外国人でもメキシコで聖職者として活動することが可能になった。国家は宗教本来の活動には干渉しないものとなり、国家による宗教行事に対する管理が緩和された。著者は、当時の政府と教会は両者が抱えていた問題を解決するためには互いに手を結ぶ必要があり、その結果として憲法の改変が実現したと結論づけている。

本書には、補論として、「現代メキシコ社会とカトリック教会—1990 年代のアンケート調査が描くメキシコ人と宗教—」と題した論考も収められている。メキシコがカトリック信仰に根ざした文化を大切にしながらも、教会による政治介入に批判的であることなどの結論が導き出されている。メキシコの大衆からの視線によるカトリック教会の姿が浮き彫りにされているため、本論と読み合わせると、メキシコにおける教会、政府、大衆の 3 者の関係がよりよく理解できるように配慮されている。

本書の研究成果は、メキシコ近代史にとどまらず、宗教と近代化がもたらす問題を論じるにあたっても示唆的である。とりわけスペイン語圏の国々の歴史研究において政治と教会権力について論じた邦文研究が決して多くない現状を踏まえれば、今後の研究に有効な指針を示していると思われる。

(たていわ・れいこ 京都外国語大学)

【書評3】

グスターボ・アドルフォ・ベッケル『ベッケル詩集』（山田眞史訳、彩流社、2009年）

松下 直弘

山田眞史氏は、ベッケルの *Leyendas* (『スペイン伝説集』彩流社、2002年) について、*Rimas* の新訳を完成された。

この本を手にとったときまず驚いたのは、百頁を超える詳細な解説だった。そこには、ベッケルの死後、彼の友人たちを中心として、どのような形で彼の詩集が編まれ、世に流布することになったかが述べられている。作者が故人となったとき、しばしば見られることだが、どれを底本とし、どの作品を入れるかという難しい問題が生じる。山田氏は手稿本やたくさんの研究書・資料を参照しながら、79篇の詩を慎重に選んでいる。そして、あえて新訳を発表しようと思いついたのはなぜか詳しく述べられている。山田氏によれば、一部の詩が抜け落ち、ベッケル作ではない詩篇が収められた偽書に基づく全訳に対し、ベッケルの真の詩を正しい形で日本の読書界に伝えたかったということである。

山田氏は、文語体ではなく、平易な口語体でベッケルを訳している。19世紀の詩人といえども、ベッケルの詩は21世紀の読者の心にもまっすぐ届くわかりやすいスペイン語で綴られている。その意味で、口語体にしたことは的確な選択だと思う。また、解説の中で詳述されているとおり、長年の研究成果を踏まえ、正確さを期す訳文作りに苦心されている。そうした訳語へのこだわりは、特に299頁以降で、旧訳と比較する形で述べられている。

この『ベッケル詩集』は、ある意味でベッケルにとりつかれたとも言える山田氏が、その魅力を熱っぽく語った書にもなっている。

「私は、ベッケルから文学を読む歓びを教えられた。またベッケルの作品を通じて文化や国境を越えて生涯の友と呼べる友人たちを得ることもできた。スペイン文学への入り口として、ベッケルは大きく、そして奥に果てしない深さを持つ扉だ。」

旧訳との相違点をひとつひとつ心苦しうに、しかし事細かに挙げた後、山田氏は、一転して楽しそうに語り始める。1990年代、バルセロナで研究生活を送っておられた山田氏が、アルベルト・ブレクア氏の主催する文学研究者たちの集いに参加していたときのことを回想する場面である。この部分は、この本の中でもことに面白い箇所である。

また、ベッケルの手稿本の一部、ベッケルが描いた絵、ベッケルの写真や肖像、ベッケルの時代の雰囲気伝える風景画など、随所に貴重な資料が挿入されていて、読む者の目を楽しませてくれる。この部分があるとないとでは、読者の鑑賞の仕方もずいぶん異なったものになるだろう。

327頁以降は、7頁にわたって訳者による注がつけられているが、ここも山田氏のベッケル研究のあとが窺える箇所、ベッケルの作品を理解する上で非常に参考になると思われる。

日本の読書界では、山田眞史訳『ベッケル詩集』をめぐる、おそらく賛否両論分かれることだろう。入念な研究調査を重ねた上で、慎重かつ正確に言葉を選んで訳出されたベッケル、流麗な美文で訳出されたベッケル、どちらを取るかは読む者の判断に任される。ベッケルの魅力の虜になった者は、自分のベッケルを思い描く。百人いれば、百人の文体が生まれるだろう。それぞれが自分のリズムや感覚に合ったベッケルを選べばいい。

山田氏は解説の中で、詩作品だけでなく、物語についても、従来の日本語訳とベッケルのスペイン語原文とのずれを指摘され、批判されているが、「緑の瞳」とか「月影」という訳語

の持つ美しい響きを、筆者はなかなか否定する気にはなれない。スペイン語をまだろくに読めなかった頃、ふと手にして夢中で読んだ大学書林刊行の対訳書『白鹿』（高橋正武訳註）の印象が強烈だったためかもしれないのだが、.....。

いずれにしても、山田氏の今回の訳書とその解説は、これからの日本におけるベッケル研究にとって必読書となるに違いない。（まつした・ただひろ 拓殖大学）

【書評4】

杉浦勉『霊と女たち』（インスクリプト、2009年）

山辺 弦

そこに名前はない。あるのはただ、誰のものともつかぬ叫びやうめき声、聞きとられることのない嘆きだけだ。女性や同性愛者、かつて奴隷であった有色人種たち、異端視された中世の神秘家から現代アメリカの辺境で生き延びるチカーノスに至るまで、特定のヘゲモニー構造によって抑圧された様々な他者たちの声は、歴史の貯蔵庫の裏側できわめて激烈に、だが知られることなく渦巻いている。

しかし、これら沈黙の声は絶えず何者かに向けて語ろうとしてきたし、他方には「沈黙を聴くことのできる聴き手」（216頁）が常に存在してきたことも事実だ。本書はそうした共鳴の相互作用を書きとめ伝えることで、さらなる他者の弁証法を起動させようとする試みに他ならない。しかしここでの主眼は、「周縁化された」集団カテゴリーとその抵抗や転覆の試みを本質化し称揚することにはない。そのような本質化は、一時期の白人女性フェミニズムやチカーノたちによるモビメント運動が陥ったように（246-247頁、250-252頁）、新たな権威的システムの形成に加担し、より大きな次元での連帯の可能性を封殺する行為につながりかねないからだ。こうした罟を避けるため本書が議論のフィールドとして選びとり、様々な時代を生きる女たちの物語に託して差し出しているもの、それが「スプリチュアリティ霊性」という場である。

「公共的な場面で議論されることのない分野であり続けてきた」（111頁）「霊性」を、本書はまず何よりも、個としての生を世界へと、即ち他者へと開いていき、双方を理解可能なものとするための媒介として再考している。従って16世紀スペインの神秘思想家テレサ・デ・アビラが自叙伝『人生の書』に記した幻視体験も、男性である神との官能的な合一を当時のコンベルソ女性が記述し得たという、周縁者による逸脱・解放を表わすエピソードとしてより、あらゆる差異を消失させ他者と合一する原理的体験としてこそ意義を認められている点には注意が必要だ。こうした間主体的な「霊性」概念は遠く隔たった時代にあつて、例えばバンバラ、ウォーカーからモリスンに至るアフリカン・アメリカン女性たちの文学作品群の中で、非政治的領域へ隠匿されてきた霊性こそ「社会闘争へ参加する正統的な方法である」（204頁）という認識へと展開され、あるいは彼女らに共感したアンサルドゥーアやモラーガといったチカーノ作家たちにより、エスニシティ／階級／ジェンダーの境界を越え多様な言説が提携する結節点として想定されたものでもある。このひそやかな系譜を綿密な補助線の数々によって顕わにする巧みな論運びは刺激に満ちていると言うほかない。時代を越えて響き合う女たちの力強く美しい物語は、イリガライの言葉を借りれば、霊性こそは「女性が西洋の歴史において、公的に語り、ふるまう唯一の場所」（145頁）として脈々と息づいてきたことを証明して余りある。

時代や地域を自在に横断する女たちの物語が本書の縦糸であるなら、横糸となっているのはバルト、イリガライ、アガンベンから M・ジャキ・アレキサンダーに至るまで、多様な名のもとに紡がれてきた思索の糸だ。これらのうち、二つの名を特権視しても不当にはあたるまい。一つ目の名となるミシェル・フーコーの晩年の思索は、西洋近代思想の基盤である「認識的な知」からは排除された、主体の個別化を逸脱し、主体に「変形」を加えることで真理に至る「霊的な知」の系譜を掘り起こそうとする意図において、理論的支柱である以上に本書の正統的な前史となっている。二つ目の名、著者にとって長く中心的な参照点であり続けた前述のチカーナ作家、グロリア・アンサルドゥーアは、沈黙させられた他者の声を聞き取りうる浸透的アイデンティティ、分岐する思考としての「ボーダーランズ」の提唱とその霊的側面の強調によって、本書のそもそもの出発点を形成した最大の声であったのではないかと推察できる。

今では帰らぬ人となった両者の未完の思考実験は、粘り強く濃密な本書の議論を支える通奏低音となって紛れもなく受け継がれている。著者杉浦勉氏の急逝により遺作となった本書もまた、未完であるゆえの論点の重複や文体の晦渋が散見されることは惜しまれつつも、それを補うほどに「霊性」の射程を正確かつ示唆的に提示し、未来の研究へ向けて確かな思考の道筋を残したと評価できるものだ。ともすれば聞き逃してしまいそうな他者の声を、「あなたのなかに、わたしのなかにいる」(228 頁) 他者の声として敏感に感知しようとする杉浦氏の研究姿勢は一貫したものであり、「霊性」という含蓄に富んだ問題設定は戦略的である以上に、著者がずっと抱え続けてきた問いを反映する根源的な主題であった。その成果としてここに残された一冊の本の声に再び感応し、これを発展させる新たな「聴き手」の存在を願うことで、氏のご冥福を祈りたい。

(やまべ・げん 東京大学大学院博士課程)

【書評5】

岡村春彦 『自由人 佐野碩の生涯』岩波書店、2009 年

吉川 恵美子

メキシコと日本には不思議な縁がある。1919 年のメキシコ共産党誕生には日本人の労働運動家片山潜の尽力があったという。そしてこの共産党を合法化したのがラサロ・カルデナス大統領であり、そのカルデナス政権のもとで一人の日本人がメキシコに政治亡命した。「メキシコ演劇の父」と称される演出家佐野碩である。今まであまり知られることのなかった佐野碩の生涯を展望する書が出た。岡村春彦著『自由人 佐野碩の生涯』である。

佐野碩(1905-1966)は 1920 年代の日本プロレタリア演劇運動を牽引する演出家として活躍していたが、左翼思想に対する弾圧を恐れ 1931 年に日本を脱出した。日本を出て東へ向かい、アメリカ、ヨーロッパを経て 1932 年にソ連に入国するが、5 年後にはスターリンの粛清を恐れ、やむなくソ連を去った。佐野は西へ向かい、大西洋を超えてアメリカに渡るが、半年後にはアメリカからも政治的な理由で追放され、1939 年に政治亡命者としてメキシコに入った。第二次世界大戦勃発前夜のことである。それから死去するまでの 27 年をメキシコで過ごした。この足跡と時代背景を考え合わせると、佐野は、ロシア革命成立から第二次世界大戦に至る時代の混乱に翻弄され、世界を放浪した悲劇的な人物に見えるかもしれない。しか

し、彼は時代を逆手にとり、それぞれの滞在先で最良の演劇体験を積み重ねながら、理想の演劇を追求する人生を生きた。タイトルに添えられた「自由人」という表現には佐野の生き方に対する著者の、羨望にも似た思いが込められていると感じる。

著者岡村春彦は演出家である。1977年にバジェ＝イン克蘭の『神の言葉』が『乱飛妖幻』というタイトルで翻案上演されたことがあるが（東京、紀伊国屋ホール）、岡村はこの舞台の演出家であった。日本で、ロルカ以外のスペイン語圏演劇に関心を寄せた数少ない演劇人の一人なのだ。『自由人 佐野碩の生涯』は演出家の視線で佐野の生涯を追っている。これが本書の最大の魅力である。まず、プロレタリア演劇時代の若い佐野の活動が語られる。佐々木孝丸、村山知義、松本克平ら、佐野の同時代を生きた演劇人たちが書き残したリアルタイムの佐野についての記録を丹念に洗い出し、時間的な推移に沿って推論を加えながら述べていくが、困難な政治の時代を生抜いた佐野とその仲間たちの青春像がくっきりと浮かび上がる。「プロレタリア演劇運動」には「弾圧」「拷問」「転向」といった暗いイメージがつきまとうが、本書に描きだされるプロレタリア演劇の闘士たちの日々は実に魅力的である。世界は変えられる、自分たちの手で変えてみせると信じていた若者たちの姿はまぶしい。逆説的な意味で幸せな時代だったのだとさえ思う。労働者のために死を賭して闘った彼らの青春は生易しいものではなかった。しかし、読む者にそうした明るい印象を抱かせるのは、社会行動としての演劇の在り方に著者自身が惹かれているからなのかも知れない。演劇が社会を変えうるなどという発想は、今の日本人からは遠い。それを信じていられた時代の空気が伝わってくる。佐野碩の実弟佐野新夫妻から著者に提供されたという一次資料も、日本時代の佐野の描写に厚みを加えている。

日本を出たあとの佐野の大まかな動きについては、ドイツ時代のことは千田是也が、ソ連時代のことは土方梅子が、アメリカ時代のことは石垣綾子がというように、今までにも複数の著者によって何度か書かれてきたが、いずれも断片的な情報にとどまり、肝心の佐野の演劇活動についての具体像はなかなか見えてこなかった。本書では、ソ連におけるメイエルホリドとの関わりが明らかにされ、アメリカのグループ・シアターやラボラトリー・シアターとの関連性についても踏み込んだ記述がみられる。貴重な情報である。しかし、残念なことに本書には注がない。そのため、著者の記述以上のことは分からない。研究論文ではないので仕方ないことかもしれないが、佐野碩についての研究が立ち遅れていることを考えれば、残念に思えてならない。

私は岡村春彦の後ろをとぼとぼと歩きながら、メキシコ時代の佐野碩の足跡を追ってきた。時間ばかりが流れ、いまだに研究はまとまらないのだが、この間、メキシコというコンテキストの中で佐野碩を捉えることの難しさを感じてきた。佐野は「メキシコ現代演劇の父」と言われ、大勢の「いちばん弟子」がいたが、没後40年以上経った今でもメキシコには佐野についてのまとまった書物さえない。メキシコ現代演劇史の中に佐野がどう位置づけられるのかはなかなか見えてこない。本書にも何人かの佐野の弟子の話が収録され、メキシコでの佐野の活動の概要が紹介されているが、佐野をとりまく文脈が見えてこない。日本時代の佐野は「プロレタリア演劇」というコンテキストの中で活動の質感が見えた。ソ連時代には「メイエルホリド」という文脈があったが、メキシコ時代の文脈は何なのか。また、佐野はコロンビアにも滞在し、その影響下に民衆演劇の萌芽がみられ、これは今日のコロンビア演劇に受け継がれている。本書にはコロンビアについての言及がわずかしかなのも残念だ。しかし、こうしたことは著者の責任ではない。著者は演出家の視点で佐野碩の全仕事を追うこと

を本書の眼目とした。本来はメキシコ演劇やメキシコ時代の佐野に関するベーシックな資料を日本語で読める状況がラテンアメリカ研究者の手でなされていなければいけなかったのだ。むろん自戒の言葉でもある。

文字通り世界を股に駆け抜けた佐野の業績の全貌をつかむにはまだ時間がかかると思われるが、本書は佐野碩研究の道標となる貴重な一冊であると思う。

(よしかわ・えみこ 上智大学)

【新刊書案内】

2009 年 9 月

ミケル・シグアン『二十歳の戦争：ある知識人のスペイン内戦回想録』内田吉彦、中原英二訳、沖積舎。

篠田有史（写真）、工藤律子（文）『ドン・キホーテの世界を行く』論創社。

寿里順平『日本人のための自習スペイン語文法』東洋書店

ミゲル・デリーベス『ネズミ』喜多延鷹訳、彩流社。

新田恵子監修『バッチリ話せるスペイン語：すぐに使えるシーン別会話基本表現』三修社。

ポール・プレストン著『スペイン内戦：包囲された共和国 1936－1939』宮下嶺夫訳、明石書店。

黛まどか『星の旅人：スペイン「奥の細道」』角川書店。

10 月

泉文明ほか編著『キャリア開発ビジネスサポート 5 言語対応事典：日・英・中・韓・西語』英光社。

伊東章『スペイン市民戦争・三十二ヶ月の叙事詩：報道にみる二つの側面』鳥影社。

伊東千尋『ゲバラの夢熱き中南米』シネ・フロント社。

J. H. エリオット『スペイン帝国の興亡：1469－1716』藤田一成訳、岩波書店。

木村建一『ビジネス・メディア・IT 用語辞典：ビジネス・時事に役立つスペイン語：西・日・英対照』南雲堂フェニックス。

エミリオ・ガジェゴ『スペイン語の落とし穴』白水社。

中西千夏『旅の指差し会話 mini スペイン（スペイン語）』情報センター出版局。

西川和子『オペラ「ドン・カルロ」のスペイン史』彩流社。

ホセ・ヨンパルト『法の理論 28』成文堂。

11 月

伊集院静『美の旅人：スペイン編』小学館。

高木洋子『スペインの風景：音楽で彩る旅行ガイド』プリズム、ヤマハミュージックメディア。

高橋均、網野徹哉『ラテンアメリカ文明の興亡』（中公文庫・世界の歴史）中央公論新社。

12 月

オラシオ・カステジャーノス・モヤ『崩壊』寺尾隆吉訳、現代企画室。

島田謹二『アメリカにおける秋山真之[中]米西戦争を観る』（朝日文庫）、朝日新聞出版。

米井力也『キリシタンと翻訳：異文化接触の十字路』平凡社。

国内学会案内

22° Congreso de CANELA

Confederación Académica Nipona, Española y Latinoamericana

INSTITUTO CERVANTES DE TOKIO

CONFERENCIA PLENARIA

Shigenobu KAWAKAMI: El flamenco —tradición inventada y tradición vivida—

PANEL

La creación de textos para la clase de ELE

Fernando BLANCO: La creación de textos para la clase de ELE. La voz de una experiencia

Arturo ESCANDÓN: La creación de textos ELE según las nociones de "actividad educativa" de Davydov y Malkova, "orientación completa" de Galperin y "aprendizaje radical" de Hedegaard y Chaklin.

Masami OGAWA: A través de los dilemas: el caso de *Primer taller de español*

PONENCIAS POR GRUPO

Grupo A Literatura

José Luis FERNÁNDEZ CASTILLO:

Aspectos de lo extremo-oriental en la obra poética de José Ángel Valente

Chikako MARUTA: Una visionaria procesada por la Inquisición. *Las visiones de Lucrecia* (1996), novela de José María Merino

Álvaro Martín NAVARRO SÁNCHEZ: Mario Bellatín, creador de teratologías

Hitomi TOYOHARA: La picaresca y el pensamiento de la época de Edo en Botchan, de Soseki Natsume

Grupo B Pensamiento e Historia

John David BARRIENTOS RODRÍGUEZ: El lenguaje dado por el otro. Una lectura a partir de Emmanuel Levinas en *Totalidad e infinito*

Yukitaka INOUE: La dominación mexicana y las mujeres reales

Nuria LÓPEZ LUPIÁÑEZ y Tadashi YANAI: El pensamiento cinematográfico de Basilio Martín Patino

Analía VITALE: Actitudes y usos de la lengua materna entre hispanohablantes en Japón

Grupo C Metodología de la enseñanza del Español Lengua Extranjera

Abel CÁRDENAS MARTÍNEZ: ¿Son fiables los resultados de las pruebas objetivas de los DELE? En busca de nuevas evidencias

María GÓMEZ BEDOYA y Javier FERNÁNDEZ SAAVEDRA: La motivación en la clase de E/LE: Estrategias de motivación para estudiantes japoneses

Juan Carlos MOYANO LÓPEZ: Cómo organizar un curso entre un profesor japonés y un profesor nativo usando las tablas de contenidos de GIDE

Gerardo VILLEGAS MUÑOZ: El habla extranjera y la interlengua como estrategias de interacción en la clase de conversación de ELE para hablantes de japonés L1

海外の学会案内

Del 24 al 25 de junio de 2010.

XIV Forum for Iberian Studies

'Los límites de la traducción literaria / The Limits of Literary Translation'.

University of Oxford.

Oxford - Reino Unido

Del 23 al 25 de junio de 2010.

Congreso Internacional «Del barroco al neobarroco: realidades y transferencias culturales»

Universitas Castellae.

Valladolid - España

Del 21 al 23 de junio de 2010.

IX Congreso de Lingüística General

Universidad de Valladolid

Valladolid - España

Del 21 al 23 de junio de 2010.

VII Congreso Internacional de Traducción e Interpretación: los Elementos Paratextuales en Traducción

I Simposio Internacional de Jóvenes Investigadores en Traducción, Interpretación y Estudios Interculturales.

Universidad Autónoma de Barcelona.

Bellaterra, Barcelona – España

Del 7 al 11 de junio de 2010.

XXXVIII Congreso del Instituto Internacional de Literatura Iberoamericana (IILI)

'Independencias: memoria y futuro'.

Georgetown University.

Washington - Estados Unidos

Del 1 al 3 de junio de 2010.

Coloquio Internacional Multidisciplinar «Historias de viajes»

Facultad de Ciencias Sociales y de la Comunicación. Universidad de Cádiz.

Jerez de la Frontera, Cádiz – España

Del 19 al 24 de julio de 2010.

XVII Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas (AIH)

Universidad La Sapienza.

Roma – Italia

Del 13 al 16 de julio de 2010.

XIII Congreso Latinoamericano sobre Religión y Etnicidad

'Diálogo, ruptura y mediación en contextos religiosos'.

Universidad de Granada, Facultad de Filosofía y Letras.

Granada – España

Del 12 al 15 de julio de 2010.

X Congreso Centroamericano de Historia

Recinto Universitario Rubén Darío.

Managua – Nicaragua

Del 8 al 10 de julio de 2010.

Congreso del Español en la Sociedad 2010

'Espacios y mediación'.

Universidad de Limerick.

Limerick – Irlanda

Del 7 al 11 de julio de 2010.

XVI Congreso Internacional de Historia Oral

'Entre el pasado y el futuro: comprensión de la historia y memoria oral'.

Praga - República Checa

Del 2 al 6 de agosto de 2010.

IX Jornadas Andinas de Literatura Latinoamericana (JALLA 2010)

Universidade Federal Fluminense.

Niterói, Río de Janeiro – Brasil

Del 27 al 30 de septiembre de 2010.

III Congreso Internacional de la Sociedad de Estudios Medievales y Renacentistas (SEMYR)

'Líneas y pautas en el estudio de la literatura medieval y renacentista'.

Universidad de Oviedo.

Oviedo – España

Del 23 al 26 de septiembre de 2010.

22è Col.loqui Germano-Català

'El concepte de Països Catalans. Llengua-Literatura-Cultura'.

Institut für Romanistik.

Viena – Austria

Del 20 al 22 de septiembre de 2010.

IV Congreso Internacional de Lexicografía Hispánica

Universidad Rovira i Virgili.

Tarragona – España

Del 16 al 18 de septiembre de 2010.

XVIII Simposio de la Sociedad Española de Literatura General y Comparada (SELGYC)

Universidad de Alicante.

San Vicente del Raspeig, Alicante – España

Del 15 al 17 de septiembre de 2010.

International Conference on 21st Century European Literatures

'21st-Century European Literature: Mapping New Trends'.

University of St Andrews.

St Andrews - Reino Unido

Del 14 al 17 de septiembre de 2010.

IX Congreso de la Asociación Española de Estudios Literarios Hispanoamericanos (AEELH)

'Literatura de la independencia / Independencia de la literatura'.

Palacio de la Magdalena.

Santander – España

Del 9 al 11 de septiembre de 2010.

XVIII Simposio de la Sociedad Española de Literatura General y Comparada (SELGYC)

Universidad de Alicante.

Alicante – España

Del 21 al 22 de octubre de 2010.

Colloque «Littérature et musique. Musique et littérature au XXe siècle»

Université de Lyon 3.

Lyon – Francia

Del 19 al 22 de octubre de 2010.

I Congreso Internacional de Profesores de Lenguas Oficiales del MERCOSUR (CIPLOM)

'Lenguas, sistemas escolares e integración regional'.

Universidade Estadual do Oeste do Paraná (UNIOESTE).

Foz do Iguaçu, Paraná – Brasil

Del 7 al 9 de octubre de 2010.

II Conferencia Internacional «Lógica, Argumentación y Pensamiento Crítico»

Universidad Diego Portales.
Santiago – Chile

Del 6 al 8 de octubre de 2010.

VII Congreso Nacional y III Internacional de la Asociación Argentina de Semiótica
'Cartografía de investigaciones semióticas'.
Posadas, Misiones – Argentina

Del 18 al 20 de noviembre de 2010.

Cuarto Congreso Internacional «Escritura, Individuo y Sociedad en España, las Américas
y Puerto Rico»
'Encuentro hispánico en homenaje a Rosa Montero, Elena Poniatowska y Mayra Montero'.
Universidad de Puerto Rico en Arecibo.
Arecibo - Puerto Rico

Del 2 al 4 de diciembre de 2010.

Colloque international «Sur la route, dans la rue: le vagabond»
Por calles y caminos: el vagabundo.
Université de Pau & des Pays de l'Adour.
Pau - Francia

『HISPANICA』編集委員会より

『HISPANICA』54号原稿募集中・投稿規定を改訂しました！

2010年3月末日締め切りにして『HISPANICA』54号に掲載される論文・研究ノート・書評を募集しております。投稿ご希望の方は『HISPANICA』53号に掲載しました改訂版投稿規定を熟読していただき、規定を遵守してご投稿下さい。多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

『会報』16号が刊行の運びとなりましたので、会員の皆様にお届けいたします。お読みいただければ幸いです。巻頭言、エッセー、書評など玉稿をお寄せいただいた執筆者の皆様には、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。今回も多くの原稿をお送りいただきましたが、いずれも読者に感動を与える力作で、編集者として最初に原稿に目を通すことができましたことを、大変光栄に思っております。次号もまた多くの玉稿が集まることを祈るばかりです。(坂東)